

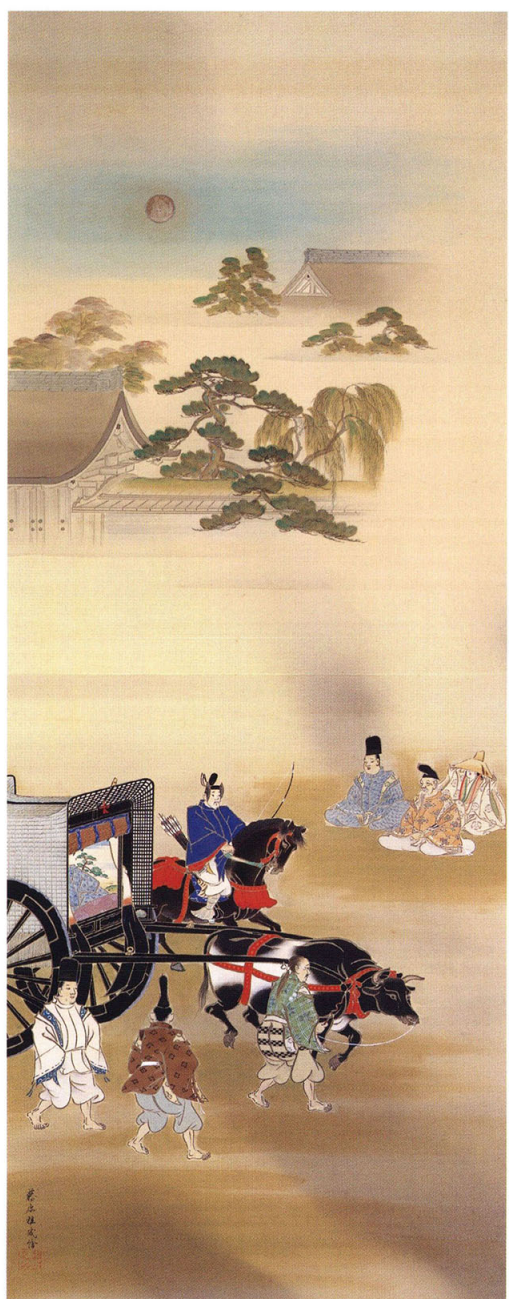
大正四年(一九一五) 絹本着色
各一四五・六×五六・五



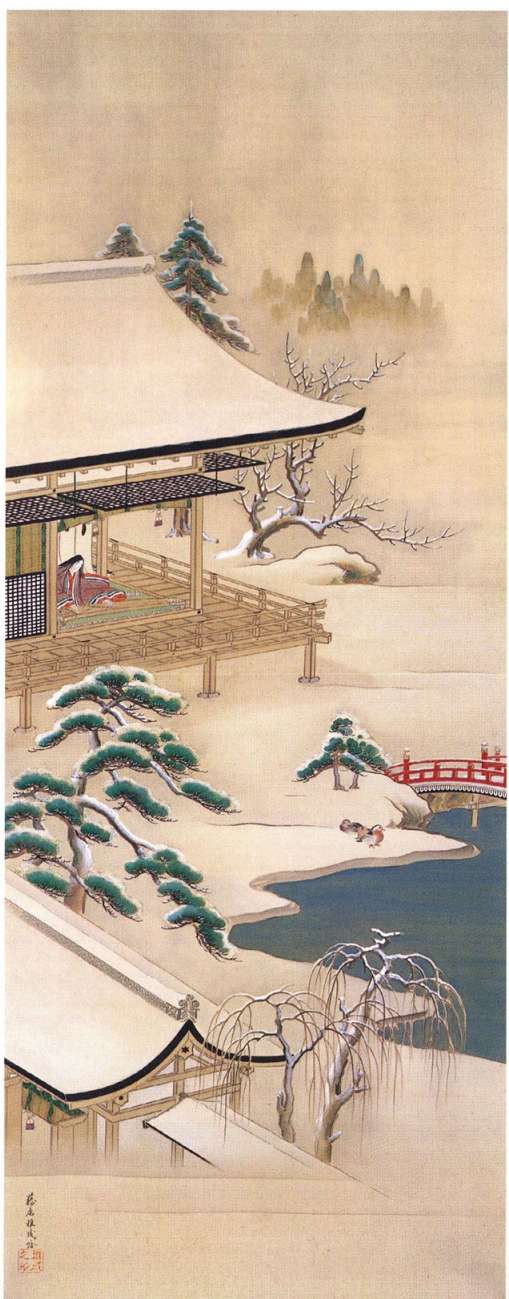
春・大江以言



夏・大江匡衡



秋・慶滋保胤



冬・紀斉名

高取稚成(一八六八—一九三五)は、幼い頃より住吉広賢のもとで大和絵を学んだ、住吉派の命脈を継ぐ最後の画家と言えよう。明治十六年(一八八三)に広賢が没してからは兄弟子の山名貫義に師事し、また関東の国学派サークルの中心にいた松原佐久について有職故実に関して多くを学んだ。また久邇宮邦彦親王の信任が厚く、良子女王(香淳皇后)の絵画教師を任され、皇太子妃となられた後もその指導を続けた。

本図は、大正四年(一九一五)の第九回文展に出品され、三等賞を受賞し宮内省買い上げとなったもの。「四家文牀」という難解な題名が付されているが、これは『古今著聞集』橘成季編纂、建長六・一二五四年成立)に収録された平安時代の文人慶滋保胤の説話がもとになっている。ある時、保胤に対し六条の宮(具平親王)から、当時の著名な文人大江匡衡、紀斉名、大江以言の三人および保胤自身の文体について御下問があり、保胤はそれに答えてそれぞれの文体を論評した。「以言の文体は、白砂の庭の青々とした松の下で舞楽蘭陵王を奏すかのような華やかさがある」といった具合の、保胤の評文を絵画化したのがこの四幅対であり、稚成は絵画化にあたりそれを四季の構成にあてはめて仕立てている。こ

した非常に趣向をこらして機知に富んだ制作手法は、大正期の文展出品作を見渡しても特異なものであったが、「近日の出品は皆単に女の顔とか単に樹木草花牛馬のありのまゝを描いてをる、何等意味あるは喜ばしい」(小山正太郎『美術評論』大正五年一月号)と高い評価を受けた。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

古典再生 — 作家たちの挑戦

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 72

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成二十八年三月二十六日発行

© 2016, The Museum of the Imperial Collections, Sanjūmaru Shōzokan